

令和3年度 事業報告書

(事業年度：令和3年4月1日から令和4年3月31日)

1. アルペンスキーチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿：10回

海外合宿：0回

■体制整備事業

強化会議：9回（全てオンライン会議）

メディカルチェック：1回

タレント発掘・育成：0回

■新型コロナウイルス感染症対策事業・新しい生活様式での選手強化事業

感染症対策の徹底：9件

新しい生活様式での選手強化事業：5回

(2) 事業の成果

1. 新型コロナウイルス感染症対策をしながら短期間の強化事業を10回開催することができた。また、取り組みの工夫により新しい生活様式に対応したオンライントレーニングのレベルアップを図ることができた。
2. 強化スタッフ間で意識改革を進めつつ、ブロック（本州、北海道）開催のスタッフを固定化させ、デフリンピックのメダル獲得に向けた体制を整えることができた。
3. コロナ禍の影響で、計画していたタレント発掘事業を開催することができなかった。

(3) 事業に対する評価

1. 新型コロナウイルス感染症対策を実施した強化合宿の成果
原則、自家用車での移動の下、北海道組と本州組に分かれてそれぞれ強化合宿を開催した。それぞれのブロックのコーチによる指導の下、徐々に技術力を向上させることができ、全国級大会で上位に食い込む選手、前年度より順位が上がった選手と全体的に順調に競技力向上が進んでいると実感できた。今後も新型コロナウイルス感染状況をみながら合宿のセッティングを進めていきたい。
2. 新しい生活様式に対応したオンライントレーニングの成果
Zoom に字幕機能の追加等による情報保障の追加を行いつつ、オンラインオンラインミーティングで指導を行った。コーチ、トレーナー自らの動作表示により選手の弱点強化、雪上に立った時に更なる強化等、一定の効果を出すことができた。
3. 選手の自発的なトレーニング

コロナ禍の影響で体力測定テストを実施することができず、年間を通じての成長ぶりを数値化する機会がなかったのは悔やまれる。また選手たちは強化合宿時しかトレーニングに励んでいないと見受けられたため、今後は自主的なフィジカルトレーニングに対する自覚はもちろん、スポーツ科学としてフィジカル、栄養学、メンタル面の強化もできるようチームとして積極的に助言を行いつつ、選手各自の自発的な取り組みの報告が上がるよう工夫が必要と感じた。

4. タレント発掘の強化

コロナ禍の影響により実施できなかったのは残念である。その代わり、スキー関係者へのヒアリング、大会のリザルト検索等を続けていくことで有望な若手選手の情報を入手できた。引き続き、情報収集の強化と SAJ、学連等の関係団体との連携を密にしていきたい。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題 1】

有望な選手を発掘することができていない

【取組方法 1】

令和 4 年度も引き続きチームの最重要テーマに掲げ、関東でのスキー教室だけでなく、北海道、東北の地元ろう学校やスキー連盟、当協会等の関係団体との連携を進めながらスキー教室を企画する。また若手選手の情報も積極的に収集していく。

【課題 2】

ガバナンス・コンプライアンスへの取り組み

【取組方法 2】

協会と共にガバナンス・コンプライアンスへの取り組みを行い、次の 3 点を実施していく。

- ① チーム内で体罰・暴力といった不祥事を生じないためにも、強化コーチ、強化スタッフはスポーツガバナンスコード原則 5、9～12 に対応した倫理規程、危機管理規程をしっかりと理解、強化事業の中で実践していく。
- ② スポーツガバナンスコード原則 6、7 に基づき、R3 年度以降も引き続き公正かつ適切な会計処理を実施し、当協会 HP を通して外部に公開していく。
- ③ 協会が目指すスポーツ・インテグリティ（誠実性・健全性・高潔性）の確保に向け、スポーツガバナンスコード原則 5 に基づいたコンプライアンス教育を合宿の合間に実施することで、ガバナンス・コンプライアンスに対する姿勢をより強化していく。

【課題3】

JSC/JPC の補助金依存体質から脱却できていない

【取組方法3】

行政の財政状況は厳しく補助金がカットされていく中で、一日も早く JSC/JPC 補助金の依存体質を見直し、NF 団体、各チームが主役となって企業スポンサー（民間資金）を貪欲に吸収し、自主財源を確保していかなければならない。そのためにもチームとしての強化戦略プランと KPI（重要業績評価指数）を明確に打ち出し色々な手段を講じていく。

- 民間助成制度の積極的な応募
- スポンサーマーケティング、スポクリ、クラウドファンディングの活用
- 企業スポンサーの確保

【課題4】

団体独立事務所を設置できていない

【取組方法4】

令和3年度に引き続き、団体独立事務所立地条件の検討をしている最中である。

2. アルペンスノーボードチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿：14回

海外合宿：0回

■体制整備事業

強化会議：3回（全てオンライン会議）

メディカルチェック：1回

タレント発掘・育成：4回

■新型コロナウイルス感染症対策事業・新しい生活様式での選手強化事業

感染症対策の徹底：14件

新しい生活様式での選手強化事業：5回

(2) 事業の成果

1. 昨年度から続いている新型コロナウイルス感染拡大による影響で、全国ろうあ者冬季体育大会、デフスノーボード世界選手権大会が中止になる等、当初の計画通りに強化合宿を実施することができなかった。その分、国内トップ選手が所属しているチームとの合同トレーニングを実施することで、選手、チームともに選手の競技力向上に必要な情報を収集することができた。

2. 聴者のアルペンスノーボード国内最高峰レースである FIS 全日本スキー選手権大会スノーボード競技、FIS 北海道スキー選手権大会スノーボード競技の両大会に出場したが、今回は想定通り実力不足により最下位となった。
3. 昨年度まで減量にあまり乗り気でなかった選手が、シーズン後半になって覚醒したかのようにフィジカルトレーニング、スポーツ栄養学に真剣に取り組むようになり、自身が周囲に公言した 10%以上の減量を達成する等、本格的なアスリートとしての自覚を持ち始めた。

(3) 事業に対する評価

1. 国内トップチームとの合同トレーニング

昨年度まではデフチームだけで強化合宿に取り組んできたが、残念ながら井の中の蛙大海を知らずということわざがあるように聴者トップ選手と互角に渡り合っていけるほどの技術が身につけていなかった。今年度はこの反省を教訓に、野藤コーチの人脈を活かして国内トップ選手が所属している長野県、北海道の強豪チームと合同で練習する機会をできるだけ多く作った。その取り組みが功を奏して聴者トップ選手の競技レベルを知るだけでなく、強豪チームの練習の様子、トップ選手がどのように練習に取り組んでいるか、強豪チームのコーチはどんな方法で指導しているのか、等などの貴重な情報を収集できた。それだけでなく、合同練習を通して様々なチームのコーチとの人脈づくり、聴者トップ選手の仲間づくりができたことは我々にとって非常にプラスになった。

2. 国内最高峰レースに参戦

アルペンスノーボード歴 2 年目の選手に、自身の技量を計る腕試し大会として聴者のアルペンスノーボード国内最高峰レースである FIS 全日本スキー選手権大会スノーボード競技、FIS 北海道スキー選手権大会スノーボード競技の両大会に挑戦してもらった。各県のトップ選手がしのぎを削るハイレベルの競技会に国内トップ選手の胸を借りるつもりで挑んでみたが、想定通りに最下位となった。本人はダメもとで諦めるところがむしろ逆に尻に火が付いて、周囲に「来年度こそ全出場者の半分以内に食い込んで見せる」と公言した。本人は大会終了後に YouTube 上のアルペンスノーボード競技選手の動画を研究、自らフィジカルトレーニングの負荷を高める、コーチに更なるステップアップするためにはどうしたら良いかを質問する等、アスリート選手らしい具体的な行動を取り始めた。その効果もあり年度末の最終合宿でようやく理想的な滑走フォームに近づくことができた。来年度は大化けしてくれることを期待したい。

3. スポーツ科学に対する取り組みに変化が見られた

オンラインフィジカルでトレーナーにフォームの欠点、脆弱性をいくつか指摘され後に、フィジカルトレーニングに真面目に取り組み始めた。また、スポー

ツ栄養学にも真剣に取り組み、自ら進んで肥満の原因になる炭水化物を極力排除、野菜や良質油の摂取を実践したところ、周囲に公言した通り 10%以上の減量に成功した。その減量効果もあって、フィジカルトレーニングを難なくこなせるだけでなく昨年度までできなかった長時間の雪上トレーニングにも十分耐えられることができた。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題】

2023、2027 年度冬季デフリンピックを見据えたタレント育成選手の発掘、育成

【取組方法】

今年度は次の3つのアプローチ方法でタレント発掘事業を2回実施した。

- ① 昨年度と同じ方法で募集案内を出して参加者を募り、雪上で選手としての適正能力を確認する
- ② 現選手の知り合いでスノーボードができる選手に声かけを行い、面談を通して冬季デフリンピックに対する本気度を確認する
- ③ 筑波技術大学(聴覚障がい者専門の総合大学)の教授から生徒の情報を収集し、面談を通して冬季デフリンピックに対する本気度を確認する

【成果】

- ① については、募集案内を出すのが非常に遅く知り合いの範囲での募集にとどまった。これに加えて、コロナ禍の影響もあり思ったより選手が集まらなかった。
⇒企画内容は半年以上前に煮詰め、ターゲットを吟味して早め早めの案内を出すべきだったと反省した。
- ② については、計画通りに1名の面談を実施した。強化合宿への取り組み上の注意点、冬季デフリンピックに対する本気度を確認したところ、強化合宿よりも自生活、就職活動を最優先したいことがわかり入会を遠慮してもらった。
⇒単にスノーボードができる。スノーボードが好きというだけでは強化指定選手として強化することは困難。生活面、家庭面などを総合的に調査、強化指定選手として継続活動できるかどうかを見極める必要がある。
- ③ については、同大学スポーツ系学科の教授と情報交換したところ、在校生に有望な選手がいることが判明したので、急遽面談を実施した。面談の結果、冬季デフリンピックに対する本気度や強化指定選手としての覚悟ができていることを確認したので、入会を許可した。
⇒スポーツ系学科の教授と情報交換することは、有望な選手を効率よ

く見つけることができることがわかった。来年度以降も継続して取り組んでいきたい。また、大学側との情報交換だけでなく今年度開拓した聴者チームに所属しているコーチと積極的に情報交換することで、有望な選手を見つけていくことができる可能性がある。これも新しい選手の発掘方法として取り組んでいきたい。

3. スノーボードフリースタイル

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿：18回

海外合宿：0回

■体制整備事業

強化会議：3回（全てオンライン会議）

メディカルチェック：1回

タレント発掘・育成：1回

■新型コロナウイルス感染症対策事業・新しい生活様式での選手強化事業

感染症対策の徹底：15件

新しい生活様式での選手強化事業：13回

(2) 事業の成果

1. 令和3年度より、新しい生活様式での選手強化活動事業を実施することによって、オフシーズンである5月～12月は主に人工芝のジャンプ練習施設にて練習をし、冬の雪上で安全性の面からなかなかトライできない回転の技に集中して取り組むことができた。
2. 各選手の得意種目に合わせてスロープスタイル&ビッグエアとボードークロスでグループ分けをし、それぞれの競技のJSBA大会（健常者がプロ資格を取るための大会）に参加した。
その結果、スロープスタイル&ビッグエアでは男子選手で総出場者による上位50%以内に入ることができ、ボードークロスでは男子選手でスモールファイナルまで勝ち上がり、女子選手もスモールファイナルまで勝ち上がり5位という成績を収めることができた。大会に参戦したことで、次の大会に向けてメンタル及びフィジカル面を自分自身で調整していく経験をさらに積むことができた。
3. スノーボード専門学校のトレーナーによる、体力測定を年2回実施し、今回フィジカル基準を導入することによって、より動ける体でレベルアップの速度を速く効率的に上げていくことができた。

(3) 事業に対する評価

1. オンライン強化合宿（新しい生活様式での選手強化活動事業）の取り入れ

各選手が自分の滑りをビデオで撮ってコーチに送りアドバイスをいただく流れになるが、これまで滑りに関してはコーチに言われることが多かったが、今回は各選手がこうした方が良いのかな？と積極的に自分から言えるようになり自分の滑りについて考える時間が増えたのは良かった。

2. 各選手の得意種目に対する意識向上

これまでスロープスタイル、ビッグエア、スノーボードクロスと3種目全部練習してきたが、グループを分けることによって、各選手の持っているスキルを伸ばしていくことができ、もっとレベルアップするために今の自分に何が足りないのか考えながら効率よく練習できるようにしていきたい。

3. フィジカル基準を導入

体力強化についてのアドバイス等をしていただくことによって、5月に実施した時より11月に実施した時のほうが全体的にレベルアップできたことは良かった。ただ各選手の基準値に達していない種目があるので、次年度は全種目クリアできるように期待したい。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題】

タレント育成選手の発掘、育成

【取組方法】

- ① デフわんぱくスキースノーボード教室にスタッフの派遣。
- ② R2年度に引き続きスカウト活動を継続。具体的には、SNS等を通して体験合宿のPRを行う等選手募集の宣伝機会を増やした。

【結果】

- ① 新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、開催中止となった。
- ② 第1回デフ・わくわくスノーボード教室（聴覚障がい児を対象とした）を岐阜県にて実施。当初4人の予定だったが、オミクロン株の急拡大の影響により3人がキャンセル。1人の子供がデフリンピックのスノーボード競技に興味を持ってきて急激に成長が見られたので、今回の事業で有望選手を発掘することができた。

4. カーリングチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿：20回

海外合宿： 0回

チーム派遣：1回

■体制整備事業

強化会議： 5回（全てオンライン会議）

メディカルチェック：1回

タレント発掘・育成：0回

■新型コロナウイルス感染症対策事業・新しい生活様式での選手強化事業

感染症対策の徹底：14件

新しい生活様式での選手強化事業：9回

(2) 事業の成果

1. 2022年世界ろう者選手権大会にミックスダブルス競技が導入され、カーリングチームのメンバーからミックスダブルスチームを作り、世界ろう者選手権大会に派遣し準優勝することができた。デフの大会だけではなく、国内のミックスダブルス選手権関東大会でも準優勝し、日本のトップアスリート達が集まる日本選手権の出場権を獲得することができた。（新型コロナウイルスで残念ながら日本選手権は中止になってしまった）
2. 女子4人制チームも今年度から再発動し、関東選手権でベスト4までに行くことができた。特に女子チームのメンバーは2～3名発掘し、チームを作ることができた。
3. マスクや消毒液の手配、カーリング用具の消毒など、新型コロナウイルス感染対策をやった上で合宿を実施し、合宿でのクラスターを起こさなかった。

(3) 事業に対する評価

1. 新型コロナウイルス感染対策

前年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、なかなか現地での合宿はできなかったが、今年度は合宿開催の度に原則PCR検査実施し、マスクや消毒液の手配、カーリング用具の消毒など、感染対策を徹底実施の上で安全に強化合宿を行うことができた。またリモートでのトレーニングや戦術指導を実施することができた。

2. コーチの設置

ミックスダブルス専門のコーチ2名を雇用し、専門的な技術指導やリモートにて評価や反省を積極的に実施したことによって、より技術向上及び選手としての心構えを教わるることができた。コーチの重要性を知ることができた。

3. 選手の自主的なトレーニングへの意欲が乏しい

個人でできるトレーニングはあるものの新型コロナウイルス感染症の拡大

により、何をしたら良いか切り替えができる選手が少なかった。各自トレーニングをしっかりとできるように事前に指導し、環境を作る必要があった。選手の大半はデジタル化に弱く昨年度はオンライントレーニングに取り組もうとする姿勢が見られなかったが、今年度は長引くコロナ禍を乗り切るためにはオンライントレーニングの必要性を改めて認識された。オンラインでカーリング練習を行うことは厳しいが、技術的なトレーニングであればオンラインでも可能なので、来年度からもトレーナーを招待してオンライントレーニングに積極的に取り組みたい。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題 1】

タレント育成選手の発掘、育成

【取り組み方法 1】

来年度も引き続き、世界選手権やデフリンピックに向けて選手やスタッフなどのメンバーを拡大していく。そのためには、カーリング体験教室を通して積極的に勧誘していきたい。次年度は選手が増加するが、技術の習熟度に合わせて育成しなければならないため、スタッフ・コーチの事前連携が重要になってくると思われる。

【課題 2】

ガバナンス・コンプライアンスへの取り組み

【取り組み方法 2】

協会と共にガバナンス・コンプライアンスへの取り組みを行い、次の3点を実施していく。

- ① チーム内で体罰・暴力といった不祥事を生じないためにも、強化コーチ、強化スタッフは倫理規程、危機管理規程をしっかりと理解、強化事業の中で実践していく。
- ② スポーツガバナンスコードに基づき、R3 年度以降も引き続き公正かつ適切な会計処理を実施し、当協会 HP を通して外部に公開していく。
- ③ 協会が目指すスポーツ・インテグリティ（誠実性・健全性・高潔性）の確保に向け、スポーツガバナンスコードに基づいたコンプライアンス教育を合宿の合間に実施することや、JPC の YouTube を活用し、スマートフォンからも手軽にアクセスできるようにし、ガバナンス・コンプライアンスに対する姿勢をより強化していく。

【課題 3】

JSC/JPC の補助金依存体質から脱却できていない

【取り組み方法3】

行政の財政状況は厳しく補助金がカットされていく中で、一日も早く JSC/JPC 補助金の依存体質を見直し、NF 団体、各チームが主役となって企業スポンサー（民間資金）を貪欲に吸収し、自主財源を確保していかなければならない。そのためにもチームとしての強化戦略プランと KPI（重要業績評価指）を明確に打ち出し色々な手段を講じていく。

- 民間助成制度の積極的な応募（昨年度はノエビアグリーン財団の補助金を活用して、体験会を開くことができたが、コロナ感染症拡大のために、なかなか実施できず、来年度はどの制度にも申し込まなかった）
- スポンサーマーケティング、スポクリ、クラウドファンディングの活用
- 企業スポンサーの確保

【課題4】

スタッフの負担が大きすぎる

【取り組み方法4】

スタッフの増員と、選手の自主的な取り組み